◆講演会　もっと知ろう、世界遺産◆ 第2弾

鎌倉大仏の歴史的意義 ～世界遺産としての位置付け～

4月18日(土)、<鎌倉の世界遺産登録をめざす市民の会>と推進協議会の共催により、鎌倉商工会議所地下ホールで、成城大学学長の清水眞澄さんによる『鎌倉大仏の歴史的意義』についての講演会が開催されました。

以下はその要旨です。

成城大学学長
講師／清水眞澄さん

鎌倉大仏は卒論にとりあげて以来、研究を続けて40年になるが、まだ分からないことが多い。本日は、鎌倉大仏とはどんなものなのか、建立の歴史と問題点、姿と形―彫刻史から見た大仏、どのように造られたのか、そして終りにという順で話をしたい。

鎌倉大仏は、鎌倉中期に鋳造された阿弥陀如来像で、昭和33年(1958)国宝に指定されている。結跏趺坐して阿弥陀定印を結ぶ。嘉禎4年(1238)3月に、僧浄光の企てにより、深沢の里で大仏堂造営の事始めが行われ、同年5月に周尺八丈の大仏の頭部が上がり、寛元元年(1243)に開眼供養されたと『吾妻鏡』に記されている。4年後の『東関紀行』の仁治3年(1242)の記事によれば、それは木造仏だったことがわかる。現在の銅造大仏は、建長4年(1252)鋳造を開始した記事が『吾妻鏡』にあるが、完成の記録はない。それから10年後くらいの完成であろうか。歴史史料の上では鎌倉大仏・鎌倉新大仏と称されているが寺名はなく、一般の寺院とは違った宗教形態をとっていたと思われる。高徳院という名は江戸時代になってからである。

大仏殿は3、4回建て替えられたようで、文明18年(1486)に露座であることや、明応7年(1498)に津波による大仏殿倒壊の記事以後は、建てられることはなかったようである。

次に建立の歴史と問題点であるが、木造の大仏と銅造の大仏とをどのように考えるべきだろうか。『東関紀行』によって最初は木造であったことが分かるが、その後銅造に造りかえられる。後に述べる鋳造技法において、この大仏は木型を原型としたと考えられるので、最初に造られた木造大仏を原型にしたとすることもできよう。

次に、勧進僧として登場する僧浄光については、大仏堂造営の事始め、開眼供養、大般若経の奉納などを行ったとされるが、その来歴はよくわからない。いずれにしても、大仏の造営には、浄光の勧進活動だけではなく、泰時・時房・時頼など幕府あるいは北条氏が力を注いだものと推測される。

平安時代の末、戦乱によって灰燼に帰した東大寺は、俊乗坊重源の勧進活動によって建久6年(1195)に再建された。その東大寺大仏と浄光の勧進による鎌倉両大仏の間には勧進のありかた、存在意義の基本的な思想に深い関わりがあるといえる。

次に形と姿であるが、鎌倉大仏はやや猫背でうつむき加減の姿に特徴がある。また、上半身に衲衣、下半身に裙を着け、装飾のない如来の姿である点は、他の多くの阿弥陀像に共通するものの、衲衣を右の肩をわずかに覆う偏担右肩ではなく、両肩を覆い胸をU字状に開けて通肩に着けるところに特色がある。また定印の立てた人差し指の爪先が親指より上に見えるという特殊な形や、瞳を造っていること、ひげをたくわえていることなど、細部にも神経が行き届いている。額の白毫と肉髻は江戸時代に修理されたものである。

そして、中国の絵画を模して造られた兵庫・浄土寺の阿弥陀像などに見られる、いわゆる宋風の影響を受けた様式と、慶派仏師の力強い作風を兼ね具えた像といえる。

大仏はどのように造られたのだろうか。一般的に銅造の大仏を造るとするならば、原像を塑土で造り、原像から外型を取り、その後に原像の表面を銅の厚さだけ薄く削って、外型との間に隙間を空け、そこに溶かした銅を流し込んで造ることになる。これを削り中子の鋳造技法という。

ところが鎌倉大仏の場合は、木造の原像から外型をとった後、外型から中型を造り、その中型の表面を削って、外型との間に隙間を設け、その間に溶かした銅を流し込んで造るという、複雑な技法を用いている。あえてそうしたのは、前記した最初に造られた木造大仏の存在が大きかったのではなかろうか。また、巨大な像であるため、下から何段かに分けて鋳込んでいるが、それには多くの型を狂いなく組みあげるには難しい技術を要する。段と段との間を強固につなぐ仕組み、何種類もの「鋳繰(いからく)り」という高度の技法を駆使していることに驚かされる。

終りになるが、鎌倉大仏は王法・仏法の拠り所として造営され、今日まで信仰が生きていること、優れた鋳造技術によって造られた日本彫刻史上重要な鎌倉時代の作例であることなど、世界遺産にふさわしいモニュメントである。